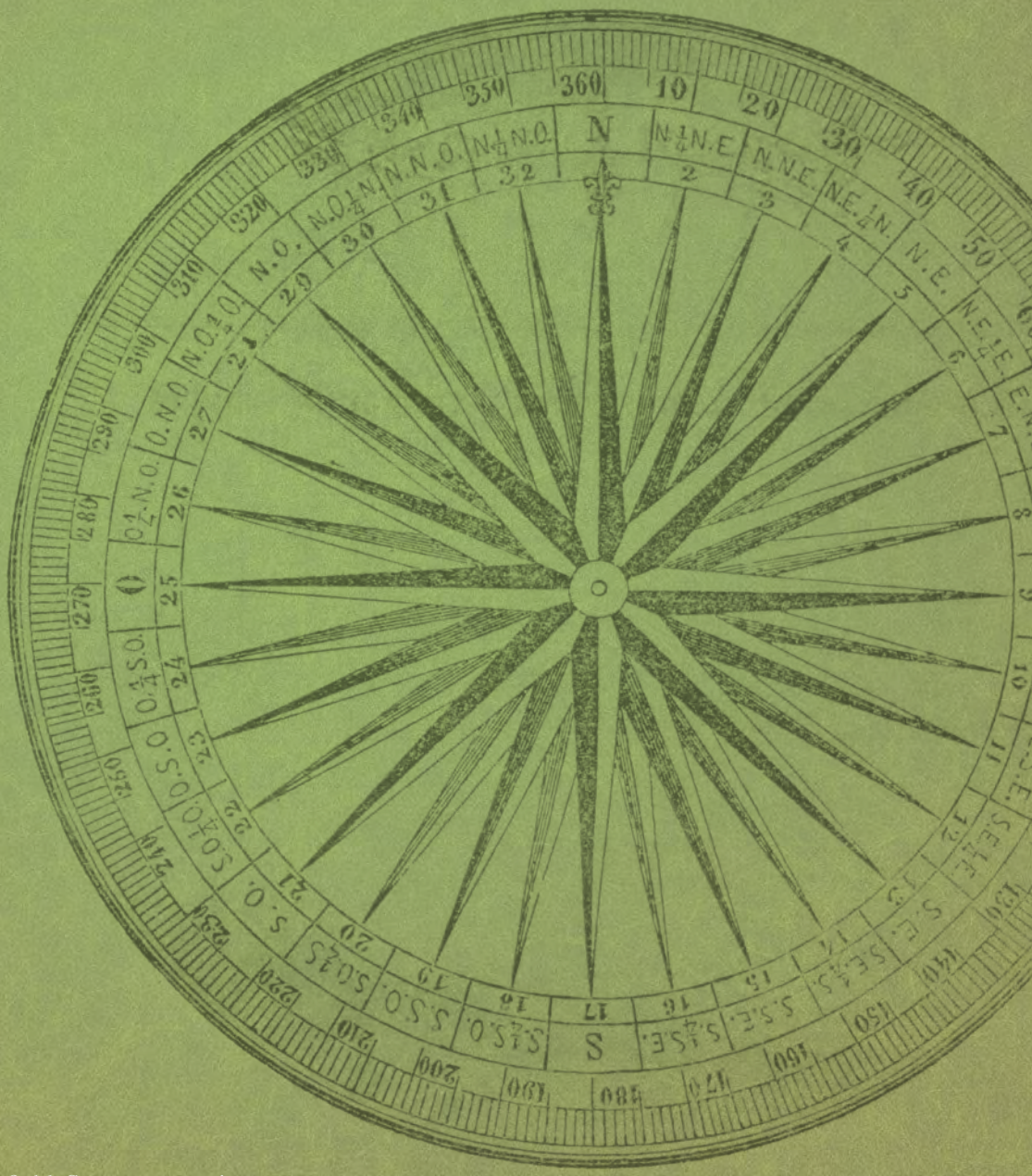
CIE

Global Peace through Grassroots Exchange

草の根交流で 平和な世界を

PROFILE

財 団 案 内



John Manjiro - Whitfield Commemorative

Center for International Exchange

公益財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念

国際草の根交流センター

CIE

その時、日米の扉が開いた

今も続く「草の根交流」の原点。
それはジョン万次郎と
ホイットフィールド船長の出会いでした。

中濱 万次郎
（ジョン万次郎）

ウィリアム・H・
ホイットフィールド

「土州万次郎漂流海路之図」（漂客談奇より）

土佐のジョン万次郎、アメリカに渡る。

1841年、漁に出た14歳の万次郎を含む5人の漁師は嵐により遭難し、絶海の孤島である鳥島に漂着。4ヵ月後、アメリカの捕鯨船によって救助されます。その船の船長こそが、ウィリアム・H・ホイットフィールドでした。アメリカ人の乗組員の間で人気者になった万次郎は、彼らから「ジョン・マン」と呼ばれ、一緒にアメリカ東海岸マサチューセッツ州フェアヘイブンに渡ります。そこでホイットフィールド船長やその家族から親身になって世話をしてもらいながら学校へ通い、英語や科学、航海術を学びました。いつもクラスの首席で、優秀な成績で卒業したといいます。その教育と生活の中から自由の国アメリカの民主主義、寛容の精神、その文化や価値観を吸収していきました。

意を決して日本へ帰国、幕末に活躍する。

万次郎はやがて、こうしたアメリカの文明や自由の精神などを日本に伝えたいと考えるようになります。日本は徳川幕府の鎖国体制の時代。日本へ戻るには死刑を覚悟しなければなりません。しかし、その思いはつのり、帰国を決意。およそ10年間のアメリカの生活に別れを告げます。帰国後、間もなくペリー提督が来航し開国を要求。アメリカをよく知る万次郎は幕府に重用されることになります。幕末という激動の時代、日本の開国と航海術や文化の紹介に重要な役割を果たすことになったのです。

二人の友情は、未来へと続く。

大海に落ちた一滴のしずくのようなジョン万次郎とホイットフィールド船長の偶然の出会い。それは時を経て、太平洋に大きな波紋となって広がり、両国を結んでいます。二人の友情から生まれた両家の交流は途絶えることなく、その子孫の代まで引き継がれています。今、自国の利益を第一に考える孤立主義の傾向が広がる世界情勢の中、ホイットフィールド家と中濱家の存在は、日米の、そして世界各国との草の根交流の可能性と大きな意義を私たちに教えてくれます。CIEが主催する「草の根交流サミット大会」は、その精神を広める架け橋として、次世代へとつなげていくものです。

草の根交流で、平和な世界を

私たちCIEのこと、目指していること

ジョン万次郎がホイットフィールド船長に救助されたあの日から始まった縁（えにし）は、177年以上の時を経て、今なおその子孫により両家の間で紡がれています。CIE（国際草の根交流センター）は、この二人の歴史的な出会いを記念し、国籍、年齢、人種、文化、宗教を超えて、多くの友情を育むことを目指し、1991年以来「日米草の根交流サミット大会」を毎年開催してきました。国家間の関係が揺らごうと、政策が変わろうと、CIEは市民による交流を絶やすことなく、草の根レベルでの友情を育んでいくことを使命と考えています。

CIEの目的は、万次郎と船長の友情の精神を受け継いで、言葉・生活習慣・文化の違いを超えて心を通わせ合えるたくさんの友情をつくっていくこと。市民同士が一人ひとりの立場で自由に意見を交換し、同じ人間として違いを認めて理解しあい、親交を深めていく機会を提供します。アメリカだけではなく、世界各国との相互理解を進めて友好関係を発展させることを支えたいと考えます。各国が内向きになっている昨今、こうした活動はいよいよ重要であり、きっと平和な世界の礎になるものと信じています。

Center for International Exchange

ご挨拶

理事長　石川 和秀

先の大戦終結から75年を過ぎ科学技術が大きく発展した今日、依然として世界は多くの困難な課題に直面しています。国家間の紛争や内乱、テロリズムの横行や環境問題を始めとする地球規模の問題などに加え、近年では新型コロナウイルスの世界的蔓延によって多くの尊い人命が奪われました。人類はこれらの課題に勇気を持って立ち向かい、子供たちが将来に希望を持てる社会を築くため、叡智を結集することが求められています。

このような時代にあって、異なった社会に住む人間同士が交流し、相互理解を深めることは大変大きな意義を持っています。とりわけ、長年に亘り交流を積み重ねてきた日本人とアメリカ人の信頼と友情は、日米両国にとってかけがえのない財産であり、国際社会全体にとっても価値ある公共財と言えましょう。

国際草の根交流センター（CIE）は、1841年にジョン万次郎とホイットフィールド船長とが出会った史実を記念して設立されました。当時日本人とアメリカ人はほとんど出会ったことのない「見知らぬ人」でした。以後の180年間、日米両国は様々な試練を乗り越えながら、今日、自由、民主主義、基本的人権といった価値観を共有し、強固な信頼関係を築き上げるに至りました。私も外務省時代に様々な場面で日米関係に携わってまいりましたが、その経験から、国民間の相互理解に根ざした信頼ほど二国間関係にとって重要なものはないと確信しております。

草の根交流のかけがえのない価値に思いを馳せ、日米国民間の相互理解が更に深まることを念じつつ、CIEの理事長として、皆様のご支援を得ながら当センターの活動のさらなる発展に力を尽くす所存です。

石川和秀

1827年
（文政10年1月1日）
土佐国幡多郡中ノ浜に生まれる

1841年
（天保12年1月5日）
土佐国高岡郡宇佐から出漁

1月29日
（天保12年1月7日）
漂流始まる

2月5日
（天保12年1月14日）
無人島生活始まる

6月27日
（天保12年5月9日）
捕鯨船ジョン・ハラウンド号に救助される

12月
（天保12年12月）
ホノルル上陸

1842年
1月
再びジョン・ハラウンド号に乗船して太平洋で捕鯨

1843年
5月7日
マサチューセッツ州フェアヘブン着、アメリカ大陸での生活始まる

1846年
5月7日
フランクリン号に乗組んで捕鯨航海に出る

さまざまなセクターとの輪を広げる

CIEが中心となり、さまざまなセクターと連携して「日米草の根交流サミット大会」を開催しています。

CIEの「日米草の根交流サミット大会」は、日米の様々な団体と連携し、多くのボランティアに支えられながら運営されています。一つひとつの大会は、開催地の自治体やNPO、また大会のために結成される実行委員会などとの共催の形をとっています。さらに、日米の中学、高校、大学とも連携し、教育的なプログラムも取り入れています。ひとつの大会には、ホームステイを含め、色々なプログラムが組み込まれますが、これらを支えているのは多くの熱意を持ったホスト・ファミリーやボランティア達です。こうした広がりを通して、より多くの方々に大会に参加してもらうことで、CIEの目的である市民レベルの交流の根を広く張って行きたいと考えています。

日米草の根交流サミット大会の輪

1850年
5月末
カリフォルニア金山に入る

8月末
ホノルル着

12月17日
サラボイド号に乗組んでホノルル出帆

1851年
（嘉永5年1月3日）
琉球 摩文仁海岸に上陸

1852年
（嘉永6年10月5日）
高知 中ノ浜に帰着

1853年
（嘉永6年6月）
ペリー来航

1854年
（嘉永7年3月3日）
日米和親条約結ばれる

1858年
（安政5年6月19日）
日米修好通商条約調印

1859年
（安政6年3月）
幕府の命により
小笠原近海の捕鯨に出帆

英会話書を編む

すべてを超えて、笑顔を広げよう

毎年、日米交互に『日米草の根交流サミット大会』を開催しています。

日米草の根交流サミット大会は、第一回目を1991年に京都で開催して以来、日本とアメリカで交互に毎年開催されてきました。国を超え、年齢・職業・言語レベルに関係なく、毎年約100～200名の様々な人が参加しています。ホスト・ファミリーやボランティアスタッフ、大会中のイベント参加者なども含めると、現在までに4万6千人以上が参加しています。

1 ホームステイで相互理解を促進します

3日間のホームステイで、その土地の日常生活を体験し、受け入れ側の国の文化を肌で感じ、本当のアメリカ、本当の日本を知ることができます。

2 地域ボランティアが活躍しています

地域に精通しているボランティアの方々の温かい協力で、その土地ならではのディープな交流プログラムが提供されており、参加者は意義深い体験ができます。

3 多様性の尊重と異文化を学ぶ機会を共有します

参加者や開催地の多様性を尊重し、その歴史、文化、社会背景を学ぶ機会を提供します。様々な分野で、違いや共通点を見出せるプログラムを組み込んでいます。

4 地域分科会で地域を活性化します

大会開催地では、参加者の受入れに際し、地域が一体となって準備に取り組みます。そのため、地域社会のつながりが強化されるなど、活性化につながっています。

5 各界の方々の協力を得ています

大会は、地元のリーダーや行政、経済界および大使館・総領事館など、社会をリードする各界の第一人者の方々に協力していただいています。

6 万次郎のスピリットと歴史を肌で感じられます

大会には毎回、ジョン万次郎とホイットフィールド船長の直系子孫、またペリー提督の子孫も参加し、草の根の方々と交流しています。

1860年（万延元年1月19日）
咸臨丸に教授方として乗込み浦賀を出帆
（桜田門外の変）

3月17日（万延元年2月26日）
咸臨丸、サンフランシスコに入港

6月24日（万延元年5月6日）
咸臨丸、品川沖に帰着

1870年（明治3年8月28日）
米国経由ヨーロッパ出張のため横浜を出帆

10月31日
ホイットフィールド船長の家庭を訪問

1871年（明治4年）
ヨーロッパより帰国

1886年（明治19年2月14日）
ウィリアム・H・ホイットフィールド船長死去

1898年（明治31年11月12日）
ジョン万次郎死去

そして未来へ、希望をつなぐ

日米の、そして世界各国との友情をこれからも確かなものとするために。

草の根で世界をつなぐという価値観に共感して、応援していただきたい。
そんな思いを込めて、CIEへのご寄附・ご協賛をお願いしています。

CIEを支え、「日米草の根交流サミット大会」を実現に導いているのは、多数の協賛企業や個人からのご寄附や賛助会費です。協賛企業や賛助会員が増えることは、国境を超えた草の根交流がさらに発展することを意味します。この活動に共感されましたら、ぜひご寄附・ご協賛という形で応援してください。

詳細情報：http://www.manjiro.or.jp　お問い合わせ：電話 03-3511-7171　電子メール manjiro@manjiro.or.jp

沿革

平成2年（1990年）	ジョン万次郎の会設立
平成3年（1991年）	第1回日米草の根交流サミット京都大会が開催される
平成4年（1992年）	財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念 国際草の根交流センター（CIE）設立 （外務省、通商産業省、運輸省、郵政省、建設省、自治省 許可）
平成12年（2000年）	特定公益増進法人認可
平成19年（2007年）	外務大臣賞を受賞 日米両国の緊密化、相互理解の深化に大きく寄与したとして その功労が認められ、元事務局長（高橋 徹）が受賞
平成25年（2013年）	内閣府より公益認定を受け、公益財団法人へ移行（4月1日） 内閣府より寄附者への税優遇がさらに厚くなる、 「税額控除」の資格を受ける（7月30日）

公益財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念
国際草の根交流センター
John Manjiro - Whitfield Commemorative
Center for International Exchange
〒102-0083 東京都千代田区麹町2-12-18 グランアクス麹町602
TEL：03-3511-7171　FAX：03-3511-7175
GRAND AXE 602 2-12-18 Koujimach, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0083, Japan
TEL：+81-3-3511-7171　FAX：+81-3-3511-7175
Email：manjiro@manjiro.or.jp　URL：http://www.manjiro.or.jp

推薦の言葉 In praise of CIE

岸田 文雄 内閣総理大臣

戦後７６年、日米安保条約署名から62年を経た現在、日米同盟は我が国の外交・安全保障の基軸であり、インド太平洋地域、そして世界の平和と繁栄の基盤です。
日米間で脈々と続いてきた草の根レベルの交流は、両国の国民の幅広い相互理解と信頼の基礎であり、今日の両国の強固な関係の構築に重要な役割を果たしてきたと考えています。５月に行われた私とバイデン大統領との会談においても、相互の交流及び協力の重要性を強調しました。
財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターが、コロナ禍においても、オンラインで日米間の様々な交流を継続されてきたことを心強く思います。同センターの長年にわたる御尽力に敬意を表するとともに、益々の御活躍及び御発展をお祈りいたします。

岸田文雄

Rahm Emanuel, Ambassador, Embassy of United States of America
ラーム・エマニュエル駐日米国大使

Congratulations to the John Manjiro-Whitfield Commemorative Center for International Exchange for your outstanding work to strengthen the bonds of friendship between the American and Japanese people.

The annual America-Japan Grassroots Summit serves as a valuable bridge between our two nations. While security and economic cooperation capture the media headlines, bringing our two people together underlies and makes possible every U.S.-Japan partnership. In these challenging times, when some nations seek to challenge the international system that protects our shared values and principles, programs like the Summit are more important than ever before.

As a former mayor I appreciate that the Grassroots Summit creates and strengthens connections between cities and regions in Japan and the United States. Such subnational diplomacy is essential if we are to solve the increasingly complex challenges of the 21st century.

The Center for International Exchange has my best wishes for many more years of continued success.

Sincerely,

Rahm Emanuel

（ジョン万次郎・ホイットフィールド記念国際交流センターの皆様、日米両国民の友好の絆を深めるための優れた活動に対し、心よりお祝い申し上げます。
　毎年開催される日米草の根交流サミットは、日米両国の貴重な架け橋としての役割を果たしています。安全保障や経済協力がメディアの見出しを飾る一方で、日米両国民の交流はあらゆる日米パートナーシップの根底にあり、それを可能にしています。私たちが共有する価値観や原則を守る国際システムに挑戦しようとする国があるこの困難な時代において、このサミットのようなプログラムはかつてないほど重要なものとなっています。
　元市長として、グラスルーツサミットが日米の都市と地域のつながりを築き、強化してくれていることに感謝します。21世紀のますます複雑化する課題を解決するためには、このような地方外交が不可欠なのです。
　国際交流センターが、これからも何年にもわたって成功されることをお祈りしております。）

Global Peace through Grassroots Exchange

参加者総数
53,300

写真提供元：首相官邸ホームページ

役員・評議員（2023年12月現在）

理事長	石川 和秀	公益財団法人　日本国際問題研究所　客員研究員 （元駐フィリピン大使）
業務執行理事	青木 千佳	公益財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念 国際草の根交流センター 事務局長
理事	小川 哲男	トヨタ自動車株式会社 北米本部長
	小沢 一郎	衆議院議員
	河野 雅治	元日本政府代表（中東地域及び欧州地域関連）
	團 宏明	三井住友海上火災保険株式会社 顧問
	平澤 寿一	ANAホールディングス株式会社 取締役 執行役員
監事	金井 萬造	株式会社地域計画建築研究所 顧問
評議員	石黒 憲彦	日本貿易振興機構（ジェトロ）理事長
	小竹 暢隆	元名古屋工業大学教授
	高島 肇久	公益財団法人 新国立劇場運営財団　理事
	中濱 京	中濱万次郎五代目
	平田 潔	NPO法人中浜万次郎国際協会 元理事
	平野 貞夫	有限会社土佐南学会 代表取締役
会長	小沢 一郎	衆議院議員
特別顧問	吉國 譲治	元三菱商事株式会社
顧問	魚岸 志乃富／北代 淳二／佐藤 久美／高見澤 孟／中山 貴恵	

サミット大会の歴史

1991年 第1回　東京・京都大会
1992年 第2回　マサチューセッツ、モンタナ、ワイオミング大会
1993年 第3回　名古屋・東京大会
1994年 第4回　バージニア大会
1995年 第5回　鹿児島・東京大会
1996年 第6回　コロラド大会
1997年 第7回　山形・東京大会
1998年 第8回　ジョージア大会
1999年 第9回　静岡大会
2000年 第10回 ウィスコンシン大会
2001年 第11回 第11回広島大会 9.11テロ発生のため延期
2002年 第11回 広島大会
2002年 第12回 テキサス大会
2003年 第13回 千葉大会
2004年 第14回 ニューイングランド大会
2005年 第15回 東海大会
2006年 第16回 コロラド大会
2007年 第17回 能登大会
2008年 第18回 ケンタッキー大会
2009年 第19回 みやぎ大会
2010年 第20回 サンフランシスコ・ベイエリア大会
2011年 第21回 高知大会
2012年 第22回 ノーステキサス大会
2013年 第23回 しまね大会
2014年 第24回 サンディエゴ大会
2015年 第25回 おおいた大会
2016年 第26回 広域アトランタ大会
2017年 第27回 奈良大会
2018年 第28回 シアトル・ワシントン州大会
2019年 第29回 兵庫・姫路大会
2020年 フィラデルフィア大会中止・延期
2021年 和歌山大会延期
2022年 和歌山大会再延期
2022年 小布施大会
2023年 第30回 オハイオ大会
2024年 第31回 和歌山大会
2025年 第32回 サンフランシスコ・ベイエリア大会予定

寄附協賛企業一覧（五十音順）

株式会社アイシン
AISIN CORPORATION

愛知製鋼株式会社
AICHI STEEL CORPORATION

株式会社オーハシテクニカ
Ohashi Technica, Inc.

株式会社紀陽銀行
Kiyo Holdings, Inc.

株式会社ジェイテクト
JTEKT CORPORATION

全日本空輸株式会社
All Nippon Airways Co., Ltd.

ダイキン工業株式会社
Daikin Industries, Ltd.

株式会社デンソー
DENSO CORPORATION

株式会社ドトールコーヒー
Doutor Coffee Co., Ltd.

豊田合成株式会社
TOYODA GOSEI CO., LTD.

トヨタ自動車株式会社
TOYOTA MOTOR CORPORATION

株式会社豊田自動織機
Toyota Industries Corporation

豊田通商株式会社
Toyota Tsusho Corporation

トヨタファイナンシャル
サービス株式会社
TOYOTA FINANCIAL SERVICES
CORPORATION

トヨタ紡織株式会社
TOYOTA BOSHOKU
CORPORATION

株式会社ニフコ
Nifco Inc.

日野自動車株式会社
Hino Motors, Ltd.

深田電機株式会社
FUKADA DENKI

富士通株式会社
Fujitsu Limited

ブラザー工業株式会社
BROTHER INDUSTRIES, LTD.

三井住友海上
火災保険株式会社
Mitsui Sumitomo Insurance
Company, Limited

株式会社三井住友銀行
Sumitomo Mitsui Banking
Corporation

株式会社宮本工業
MIYAMOTO KOGYO CO.,LTD.

明治安田生命保険相互会社
Meiji Yasuda Life Insurance
Company

公益財団法人森村豊明会
MORIMURA HOUMEIKAI
FOUNDATION

北海道通信ビル株式会社
HokkaidoTsushinBldg Co.

公益財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念
国際草の根交流センター
John Manjiro Whitfield Commemorative
Center for International Exchange